

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿 「言葉による伝え合い」についての一考察

初等教育科 渡 邊 輝 美

【要旨】

「言葉による伝え合い」の基盤は、乳児期に身近な人と気持ちを通じ合う心地よさを感じることにある。信頼できる人とのやり取りの中で、受け止められ、認められる経験を重ねることで、人と気持ちを通じ合うことの喜びや心地よさを感じるようになる。この心地よさが、人と思いを分かち合いたい、人に自分の気持ちを伝えたい、相手の思いを知りたいという「言葉による伝え合い」を生み出す。

そのためには、幼児が主体的に環境にかかわり合いながら、言葉を自分のものにしていく生活が大切であり、幼児期に人と言葉をかわす楽しさを十分に味わうことが重要なのである。

幼児の「言葉による伝え合い」は、周りの人々との信頼関係をもとに「話す→聞く→伝え合う」という3つの過程を経ながら育まれていく。

【キーワード】

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿 言葉による伝え合い 話す 聞く 伝え合う
心が動いた経験 保育者の役割

1. はじめに

小学校学習指導要領、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領が平成29年3月31日に改訂された。

幼稚園教育要領では、幼稚園において、生きる力の基礎を培うため、幼稚園教育の基本を踏まえ、「幼稚園教育において育みたい資質・能力」を育むよう努めるものとした。

また、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」では「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5領域のねらい及び内容が総合的に指導される中で、幼児の幼稚園修了時の具体的な姿として示された。それらは「幼稚園教育の基本から逸脱しないよう慎重に配慮する必要がある

る」と指導を行う際に考慮するものとされた。

さて、この「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」で示された10の姿の1つである「言葉による伝え合い」とは、どのような姿なのか。本研究では、領域「言葉」のねらい及び内容を踏まえ、その基盤や過程、言葉の発達段階に応じた適切な援助についての分析を行う。

2. 研究の目的

平成29年3月31日に改訂された幼稚園教育要領では、領域「言葉」におけるねらい及び内容が以下のように示された。

領域「言葉」のねらい及び内容

<ねらい>

経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。

- (1) 自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。
- (2) 人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。
- (3) 日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせる。

<内容>

- (1) 先生や友達の言葉や話に興味や関心を持ち、親しみをもって聞いたり、話したりする。
- (2) したり、見たり、聞いたり、感じたり、考えたりなどしたことを自分なりに言葉で表現する。
- (3) したいこと、してほしいことを言葉で表現したり、分からないことを尋ねたりする。
- (4) 人の話を注意して聞き、相手に分かるように話す。
- (5) 生活の中で必要な言葉が分かり、使う。
- (6) 親しみをもって日常のあいさつをする。
- (7) 生活の中で言葉の楽しさや美しさに気付く。
- (8) いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする。
- (9) 絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像をする楽しさを味わう。
- (10) 日常生活の中で、文字などで伝える楽しさを味わう。

このような領域「言葉」のねらい及び内容を踏まえると「言葉による伝え合い」は、具体的には、「先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などの親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。」姿と考えられる。

これまで、幼児の「言葉とは何か」「言葉が育つ環境とは」「発達過程と言葉の関係」「言葉を育てる環境および保育者の援助」についてはいろいろな先行研究で明らかにされてきた。

そこで、今回の幼稚園教育要領の改訂で示された「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の1つである「言葉による伝え合い」について、本研究では、言葉による伝え合いの姿の基盤やどのようなプロセスを経て生まれてくるのかを示す事を目的とする。また、幼児期の豊かな「言葉による伝え合い」を育むための保育者の援助についても検討し、明らかにしたい。

3. 研究主題に対する基礎的研究

(1) 幼児と「言葉」について

1) 乳幼児期における言葉の発達

乳幼児期における言葉の年齢別発達についての概要は以下のようなものである。

- ・ 1歳前後：はじめて意味のある言葉を発する。
- ・ 1歳半から2歳頃：語彙が急速に増大し、2語文を獲得する
- ・ 3歳前後：3語以上をつなげて文を話す。幼児同士で会話を成立させられるようになる。
- ・ 4歳児頃：構文が一応完成し、自分の言葉で日常会話できるようになる。
- ・ 5歳児後半：相手の話を注意して聞いて理解するようになり、相手の思いや考え、経験したことなどを相手にわかるように工夫しながら話すようになる。

2) 発達過程における言葉の特徴

幼児の生活は、体験を基盤とした遊びを中核として成り立っている。その中で、幼児自らが獲得していく言葉や生活していくために必要な言葉、生きた言葉を育てていくことが重要である。

つまり、言葉にして他者に伝えたいくなるような生き生きとした体験が話すことへの動機づけとなり、言語表現を生み出すといえる。

このような幼児期の発達から、言葉の特徴については、以下のように考える。

- ・「一次的言葉」：幼児の言葉は、具体的・現実的な場面で状況の文脈に支えられた親しい者との会話であるという特徴をもつ。
- ・「二次的言葉」：現実を離れた場面で言葉そのものの文脈において成立し、不特定かつ一般的な対象との間に一方的に展開される言語が獲得されるのは児童期である。岡本（1988）

また、言葉は、話し相手に向けた発話（外言）だけでなく、自己との対話（内言）にも用いられるようになる。これは、認識や思考を深める働きをもつ。

3) 言葉を育てる環境

言葉は身体感覚を通して体感する。幼児の内面的で自発的な経験から生まれ、身についてくるのである。したがって、幼児期における豊かな体験や言葉のやりとりが言葉の発達には必要であると考えられる。ブルーナー（Bruner, J.S. 1988）の唱える応答的なコミュニケーションの足場作りの役割である。

言葉が育つ環境として重視したいのは、そこに「表現を生み出す体験」が展開されていることである。活動の中で感じる生き生きとした感情を“仲間と共有したい”という欲求や共に経験した楽しさを繰り返して仲間と共有して振り返ろうとする欲求は、幼児の言語活動を大きく推進する。

また、幼児の言葉を育み進歩させるためには、保育者や保護者など大人の支援が必要であり、人的環境が言語発達に与える影響はきわめて大きい。

豊かな言葉の育成は、「人と話すことや聞くこと」が楽しいという、人と関わり合う力、コミュニケーション力の育成であり、人間関係の基盤である。

つまり、幼児期に遊びを通じて自分以外の人とコミュニケーションをとりながら、「生きる力」の基礎を培うことが「言葉」を獲得する上で最も重要なことである。

(2) 「言葉による伝え合い」について

1) 「言葉による伝え合い」の過程

「言葉による伝え合い」とは、相手の話を聞いて自分の思ったことを言葉で表現する、それに対して、相手も自分の思いや考えを言うことである。

そして、「言葉による伝え合い」の過程は、乳児期に生まれた人への信頼感を基盤に

「話す→聞く→伝え合う」という3つの過程を経ながら、育まれていく。（無藤2011）

また、「言葉による伝え合い」の具体的な姿は、前述のように「先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。」（幼稚園教育要領2017）である。

2) 「言葉による伝え合い」の発達

4歳児頃には、仲間意識が高まり、少人数グループの伝え合いができるようになる。

5歳児後半には、自分の考えをまとめ、自分とは違う考えに触れながら考えを深めていく。さらに、相手や状況に応じて、言葉の使い方や表現の仕方を変えたり話し方を工夫したりする

ようになる。遊びや活動を振り返るなど「みんなに伝えたいこと」をクラスで共有し、「みんな考えてほしいこと」など共通の目的に向かって話し合う活動にも取り組めるようになる。このような姿が「言葉による伝え合い」の姿であり、幼児が言葉を介して、人との信頼関係を深めていこうとする姿といえる。

話すこと、聞くこと、表現することは、自分の思いを相手に伝え、人と関わりをもつ楽しさを味わうことであり、「言葉による伝え合い」の力を培うものである。

3. 研究の方法

A市立幼稚園5歳児1クラスの平成28年・29年度の2年間における合計62名の園児から抽出した園児の観察記録

平成28年4月～2月の6事例、平成29年度4月～6月の4事例の中から抽出した事例を考察する。

4. 論考の視点

本研究では、5歳児の遊びの姿において、幼児同士がどのように言葉で自分の思いを伝え合うのか「言葉による伝え合い」（無藤2011）の3つの過程に依拠し考察する。また、言葉で自分の思いを伝え合うために必要な保育者の援助についても明らかにする。

保育においては、幼児が主体的に環境にかかわり合いながら、言葉を自分のものにしていく生活が大切であり、幼児期に人と言葉をかかわす楽しさを十分に味わうことが重要なのである。

「言葉による伝え合い」は、
乳児期に育まれた人への信頼感を基盤に
「話す→聞く→伝え合う」という3つの過程
（無藤2011）を経ながら、育まれていく。

この「言葉による伝え合い」の3つの過程の「話す」「聞く」「伝え合う」については、以下

のように捉える。

(1) 話す

「伝えたい人」がいて「伝えたいことがある」と言葉を発する。生活や遊びの中で、経験したことや心が動いたことを「きいて！」と伝えたいくなるような「伝えたいこと」がある生活や遊びの充実が必要である。保育者や保護者は、幼児の表現が不十分でも、思いをくみ取り、応えていくことが求められる。

「伝えたい思い」があっても、言葉の獲得途上にある幼児には、その思いを言葉だけで表現するのは難しい。保育者などの的確な言葉で代弁・表現があることで、言葉で表現することの喜びや話すことの意欲につながる。

(2) 聞く

自分の言葉をしっかり受け止め、十分に聞いてもらう経験を重ねた幼児は、人の言葉にも耳を傾けるようになる。

発達段階を考えると、幼児にとって聞くことは容易なことではない。

しかし、信頼関係がある少人数の親しい人で、興味にある話であれば聞くことができる。

(3) 伝え合う

友達同士の関係が深まると、幼児は遊びや生活の中で心が動いた経験などを「伝えたい」と思うようになる。

保育者が幼児の伝えたい思いをほかの幼児たちに伝える機会を設けることが大切である。

幼児がクラス集団の中で、自分の思いを言葉で表現したり、友だちの話を聞いたりすることは容易なことではない。

大勢の人の前で話す難しさと相手の話を聞いて自分の考えや思いを話す難しさがある。そのため、何を言っても受け入れてもらえる関係づくりが必要になってくる。

信頼関係が築かれてはじめて「伝わる言葉」が誕生する。

5. 事例と考察

本研究では、論考の視点を踏まえ、事例より考察する。

事例1 自分の思いを話す

A児は、入園当初から外遊びの時間になると、お気に入りの青色の三輪車に乗り、一人で遊び始める。この日も、園庭をぐるぐると漕いで回り、一人で遊んでいる。A児は一人で三輪車に乗って、園庭を行ったり来たりして遊んでいると、小学校の入り口前のスロープ(坂道になっているところ)で三輪車をしている友だちがいることに気付く。しばらく一人で遊んだ後、A児も三輪車に乗ってスロープのところに行く。その場にいる友だちに自分から話しかけることは無いが、友だちが遊ぶ様子を見て、自分も同じように坂道を下る遊びを始める。自分で漕がなくても進むことを楽しんでいる様子である。助走をつけて乗ったり、足で漕ぎながら坂を下ったりといろいろな乗り方をして遊んでいる。A児は、「俺の方が速いよ!」「見て!」と保育者や友だちに言いながら何度も何度も繰り返し坂道を下ることを楽しんだ。しばらくその場で遊んだ後、再び園庭に戻り三輪車で遊んでいるが、途中で園庭に山のようにになっている場所があることに気付く。するとA児は、先程と同じ要領で、その山の坂道を下って遊び始める。保育者が「ここも面白そうだね。」と声をかけると、「うん。」と言い、夢中で何度も坂を下り続ける。

A児は、友だちに乱暴な行動をとることが多い。製作活動や自分なりに工夫する遊びに苦手意識がある。また、友だちと同じように遊ぼうと思ってもうまくいかず、遊びが長続きしない。保育者はA児が、友だちと一緒に遊ぶ中で、めあてをもったり、自分なりに工夫したりすることの楽しさを感じてほしいと願い、援助を行った。A児が自分で考え行動し、言葉で思いを伝えられるようになってほしいと思っていた。

A児は、今まで自分で工夫しながら遊ぶ姿はあまり見られなかった。しかし、今回は、友だちが遊んでいる様子を見て、どうやったら速くなるのか工夫する姿があった。「俺の方が速いよ。」という言葉からも、今まで自信をもてずにいたA児が、自信をもって遊ぶことができ、自分の思い

を保育者に話すことができていると思われる。

A児が遊びの中で、保育者に話したくなるような体験をすることで、言葉で表現しようと意欲が高まり、自分なりの言葉で自分の思いを話すことができた。保育者が暖かく見守ったり、新しい場所を見つけたことを認めることで、自信をもち、遊びにも続けて取り組めた。

事例2 保育者に自分の思いを話す

A児は、おみせやさんごっこでくじ引きやさんをすることに決めた。しかし、何をすればよいのか分からず座ってペットボトルのキャップを触りながら遊んでいる。保育者が、くじ引きやさんの幼児たちに「みんな自分のくじ引きを持ってるんだね!お客さんがやりたいくじ引きを選べるの?」と尋ねる。幼児たちは「そうで!!」と言い、それぞれが自分のつくったくじ引きを保育者に見せ始める。A児はその会話の様子を黙って見ている。保育者は他のお店に行き、しばらくしてくじ引きやさんの様子を見に行く。A児が「先生、紙ちょうだい。」と言う。保育者が「何に使うの?」と尋ねると、A児は「俺もくじ引きつくる!」と嬉しそうに言う。A児は保育者と一緒に紙を選びに行き、オレンジ色の画用紙を手取る。A児は、「先生も一緒につくろう。」と言い、保育者を自分の近くに座らせる。はさみで紙を小さく切り、数字を書き込むA児の姿を保育者が見ていると、「先生もやって!」と言う。保育者が手伝い始めると、A児は、「はずれはバツにしよう。」「100000000は大当たりなんで!」など、嬉しそうに自分のくじ引きの説明を始める。片づけの時間になると、「先生、また続きしような。」と言い、自分のくじ引きを、くじ引きやさんのよく見えるところに置いて部屋に戻る。

A児は、初め自分のやりたいことが見つからず、グループの友だちが何をしているのかも分からなかった。しかし、友だちが何を作っているのかを知ると、刺激を受け、「自分もくじ引きを作りたい」というめあてがもてた。そのことにより、自分なりにいろいろと工夫する姿が見られ、「はずれはばつにしよう。」など保育者

に「自分の思いを言葉で話す」ことができた。

A児の要求を受け入れ、安心して思いを伝えられる保育者、話したいと思える相手、安心して話せる相手がいるということが大切であり、身近な大人の関わりが幼児の言葉に大きく影響を与える。

言葉が育つ環境として重視したいのは、そこに「表現を生み出す体験」が展開されていることである。活動の中で感じる生き生きとした感情を“仲間と共有したい”という欲求や共に経験した楽しさを繰り返し仲間と共有して振り返ろうとする欲求は、幼児の言葉で「話す」活動を大きく推進する。保育者に言葉にして伝えたいくなるような生き生きとした体験が話すことへの動機づけとなり、「自分の思いを言葉で話す」姿を生み出した。

事例3 友達の思いを「聞く」

外遊びの時間に、A児はS児から、「今は一緒に遊びたくない。」と言われてしまう。毎日一緒に遊ぶ仲だが、A児が毎回S児の嫌がることをしてしまうためである。A児は悲しい顔で「Sくんと一緒に遊んでくれん。」と保育者に言いに来る。保育者が「何で遊びたくないのかは聞いた？」と尋ねると、A児は「まだ聞いていない。」と言う。保育者が「じゃあAくんは、何でSくんから“遊びたくない”って言われたんだと思う？」と尋ねると、A児は「俺がいつも嫌なことするから。」と言う。そこで保育者が「自分で嫌な事してしまうって分かってるんだね。じゃあSくんにどうすれば遊んでもらえるか聞きに行ってみる？」と言うと、「行く!!」と言い、自分からS児のところへ行く。保育者がS児に「Aくんは、自分が嫌な事するから遊んでもらえないって言ってるけど、あってる？」と尋ねると、S児は頷く。A児は悲しそうに話を聞いている。保育者が「今日だけ遊ばないの？それともずっと？」とS児に聞くと、「ずっとじゃない。今だけ。今日の学童の時は一緒に遊ぶよ。」と答える。A児が「今も遊びたい。」と言う。しかし、S児は「今は遊ばない。」と言う。保育者が、「Sくんは、Aくんはどこを直してほ

しいの？」と聞くと「嫌なことせんでほしい。」と言う。A児が「わかった。嫌な事せんけん。」というが、それでもS児は「今は遊ばない。」と言い張る。すると、A児は突然怒り出し、「いいよ。勝手にすれば。俺あそこで一緒にサッカーするけん別にいいし!!もう遊ばん!!」と言う。保育者が「Aくん、そういうところをSくんは直してほしいんだよ。」という、自分が嫌なことを言ってしまったと気付いた様子で、「ごめん…」と言って立ち去る。その後、A児はS児の様子を気にしながら、保育者と一緒に遊んだ。

今まで、A児が嫌なことをしても、謝れば許して遊んでくれていた大好きなS児から「今は遊びたくない。」と言われ、A児は初めて自分の言動を振り返り、反省することができた。自分の思い通りにならないため、「もういい!」と自分本位になりかけたが、保育者の声かけにより、友だちの思いにも気づくことができた。

友だちの言葉を「聞く」ことで、相手の思いに気付いたり、自分の行動を振り返ったりできるようになった。この事例では、友だちの本当の思いを出させてA児に伝える保育者の【中継者】の役割が重要になってくる。

また、大好きなS児の言葉であることが、A児が耳を傾けて聞くことができる要因となり、このようにお互いに思いを出し合う体験が言葉による伝え合いの基盤になると思われる。

事例4 友だちと思いを「伝え合う」

キングブロックで作った10人乗りの長い電車に乗って遊んでいる場面。B児は先頭に座り、電車が出発するのを待っている。保育者が「この電車どうやって動かすの？」と電車に乗っている幼児に尋ねると、K児が「運転手になってあげる!」と言い、電車を引っ張り始める。しかし、電車は全く進まない。保育者が「あれ?今日は動かないね。」と言うと、K児が電車のタイヤが外れていることに気付く。壊れた部分を修理するため、K児はB児に「ちょっと降りて。」と言う。しかし、B児はなぜ降りるのか分からず、「え～嫌だな～。

俺ここに乗りたい。」と言う。K児は「なんで！降りて！」と再びB児に言うが、B児は「え〜。」と嫌そうな表情で降りようとしな。保育者がK児に「なんで降りないといけないかは言ったの？」と声かけすると、K児はB児に対し、「ここ壊れてるから一回降りて！」と言い換える。すると、B児は笑顔になり「なんだ。そういうことか。」と言い電車を降りる。そして、K児が修理する様子を見ていたB児だが、K児がなかなか修理できないことに気付く。B児は「これ一回外したほうがいいんじゃない？」とK児に言い、修理を手伝い始める。B児はK児と一緒に電車の壊れている部分を修理しようとする。しかし、電車にまだ5人乗っているため、持ち上げられず、ブロックをはめることができない。B児は「できないなあ。」とつぶやく。保育者が「なんでかなあ。」と言うと、B児は「だってみんなが乗ってるから重くて持ち上げられん。」と言う。B児は乗っている友だちに降りてほしいと思っているが、それを言えずにいる。保育者がB児に「修理するからみんなにも降りてもらったら？」と言うが、「う〜ん。」と言いながら何度も電車を持ち上げてみようとする。すると、K児が電車に乗っている友だちに「ちょっと降りて！」と声をかけ、無事に電車を修理することができた。保育者が「2人で修理できたね！やっとなんか乗れる！」と声をかけると、B児は満足した様子で「よっしゃ！乗ろう！」と言い、電車に乗って遊び始める。

B児は“電車に乗りた”という思いで一人遊び始めた。K児が電車の修理を始めても、気にせず電車に乗り、動くのを待つだけだった。しかし、K児から、「修理したいから降りて。」と思いを伝えられたことで、友だちがしていることにも目を向けることができた。

さらに、“電車に乗って遊びたい”という強い思いもあり、K児に「これ一回外したほうがいいんじゃない？」と電車を修理する方法をB児なりにいろいろと考え、アイデアを話したり、一緒に電車を修理したりする姿になった。友だちが乗っている場面では、保育者がB児の思いを友だちに伝えられる場を設定する【交通整理者】や【司会者】の役割をすることで「だってみんなが乗ってるから重くて持ち上げられん。」

と自分の困っていることを友達に話すことができ互いに思いを伝えあう互いに思いを伝えあう姿になった。

やってみたい”と心が動いた経験が自分の考えたこと「伝えたい」と思うきっかけになる。

B児は言葉ならではの楽しさや言葉で伝わる喜びを感じながら、人とのつながりを深め、視野を広げ自分の世界を広げていく。

そして、自分の気持ちが相手に伝わっていると実感できると、伝え合う楽しさを味わうことができる。このような体験を積み重ねると、場面に応じた言葉が使えるようになってくる。

したがって、幼児同士が「言葉で伝えあう姿」を育むためには、受容的・応答的な保育者の援助も不可欠であり保育者の援助をモデルとして幼児同士の「言葉による伝え合い」が始まる。

また、伝え合いを育む保育者の役割は、【中継者】「交通整理者」「司会者」（岩田2011）の3つであるといえる。

事例5 保育者の役割

B児は、友だちと一緒に時間をかけて積み木でお城をつくりあげた。遊んだ後に保育者が、積み木でつくったものを飾るコーナーをつくり、そこにB児もお城を飾った。周りの幼児がB児のつくったお城を見ており、B児はとても満足した様子で部屋に戻った。

給食の準備時間に、友だちが積み木のコーナーにぶつかり、B児がつくったお城を壊してしまう。ぶつかった友だちがそのことについて謝りに来ると、B児はすぐに「いいよ。」と言って友だちを許した。その後、B児は担任にその出来事を報告しに来る。

B児：「先生、K君がね、僕がつくった積み木にぶつかったから壊れたんだって。でもね、別にいいから僕許してあげた。」

保育者：「頑張ってたから残念だね。でもB君、許してあげられるのすごく優しいね。」

B児：「別にいい。」

保育者：「そうなんだ。またつくるの？」

B児：「うん。またつくればいい。」
と言い、B児は普段と何も変わらない様子で給食を食べ始める。次の日、壊れたお城をつくり直せるように机の上に倒れた積み木を並べると、B児はすぐにお城を修理し始める。「一人でできるかなあ。」と眩きながら夢中でつくり、出来上がると保育者に「つくり終わったよ！」と報告をする。保育者は再び積み木をコーナーに飾る。

B児は、自分がつくった作品を飾れる環境を保育者がつくってくれたことで、たくさんの友だちに見てもらい、満足感を味わうことができた。その満足感があつたことと、友だちがすぐに思いを伝えに来てくれたことで、友だちの思いを素直に聞き入れることができたのではないかと思う。保育者が、友だちとじっくり遊びを考えることのできる時間の確保をしたことが考える力を育て、友だちからも見てもらう環境を整えることもお城を作ったことの満足や自信につながった。

また、B児が自分の気持ちを立て直し、保育者が「許してあげられるのすごく優しいね。」と認める声かけをし、温かく見守ることで、B児は再び遊びに取り組むことができた。結果的には、B児が「またできた！」「つくり終わったよ！」と自分の思いを保育者に話す姿となり、充実感を感じる事ができた。

このように、幼児は友だちとのかかわりの中で思い通りにならない体験があつても、保育者の援助により思いを立て直し、再び続けて取り組む姿となり、成し遂げる充実感を味わい、自信をもつ。このことが友だちとかかわる原動力となり、言葉によるお互いの思いを伝え合う姿につながると思われる。

6. 総合考察

「言葉による伝え合い」の基盤は、乳児期に「身近な人と気持ちが通じ合う」（保育所保育指針2017）その心地よさを感じることにある。

信頼できる人とのやり取りの中で、受け止められ、認める経験を重ねることで、人と気持ちを通じ合うことの喜びや心地よさを感じるようになる。この心地よさが、人と思いを分かちあいたい、人に自分の気持ちを伝えたい、相手の思いを知りたいという「言葉による伝え合い」の育ちの基盤になる。

そのためには、幼児が主体的に環境にかかわり合いながら、言葉を自分のものにしていく生活が大切であり、幼児期に人と言葉をかわす楽しさを十分に味わうことが重要なのである。

また、「言葉による伝え合いの力」とは、感じたり考えたりしたことを、言葉や表現を使って表し、友だちや保育者に伝えたり、友だちや保育者が言葉や表現を使って表していることを受けとめたりする力であると考ええる。

この力により、幼児が集団生活の中で、感じたり、考えたりしたことを心の中で整理し、もの見方や考え方を確かなものにしていく。

幼稚園教育では、生活体験を通して、その基盤となる言葉による豊かな表現や言葉の感覚などを育むとともに、言葉による伝え合いを育てていくことが大切である。

また、「言葉による伝え合い」についての「小学校教育との円滑な接続」「保育者の役割」「保育者に期待される役割」については以下のように考える。

(1) 小学校教育との円滑な接続

小学校教育では、自ら考えたことを言葉で表現し、保育者や友だちと意見を交換しながら自らの考えを深める学習が中心となる。

幼児期に体を使って十分に活動し、様々な対象にかかわり、その体験を言葉や表現で振り返ることが、小学校教育に引き継がれ、小学校の授業を成り立たせる力へとつながっていくと思われる。

しかし、自分の思いを中心にして活動する幼

児期の幼児たちには、「言葉で伝え合う」ことは容易なことではない。自分の思いは話せても、相手の思いを受け入れて自分の思いをまとめ、お互いに意見をまとめるまで発展させることは難しい。したがって、保育者の役割が重要になってくる。

(2) 保育者の役割

幼稚園教育要領では、保育者の役割を『よりどころ』『モデル』『共同作業』『理解者』『遊びの援助者』の5つであるとされている。具体的には、日々の保育の中での保育者の役割は、物的・空間的環境を構成する役割と、その環境の下で幼児と適切な関わりをする役割とがある。

このことを踏まえ、事例より「言葉による伝え合い」における保育者の役割は、**「中継者」「交通整理者」「司会者」**であるといえる。

また、幼児と適切な関わりをするためには、幼児一人ひとりの特性を的確に把握し、理解することが基本となる。

幼児を理解し、活動の場面に応じた適切な指導を行う力をもつことが重要である。さらに、言葉の育ちの背景となる家庭との連携を十分に図りつつ教育を展開する力なども求められている。

幼児理解と共に重要なのは保育者のモデルとしての役割がある。

幼児は、言葉の感覚を磨き、表現を豊かにするために、集団生活の中で友達や保育者、絵本やお話の言葉を取り入れる経験をしている。

そのことから、保育者は自らも言語感覚を豊かにし、生活の中で言葉の楽しさや美しさ、おもしろさに気づかせ、伝え合う喜びを味わうことのできる保育を展開することが求められている。

(3) 保育者に期待される役割

保育者に期待される役割とは、①幼児理解の

広さと深さ ②総合的に幼児の獲得しているものをみる力 ③幼児の視点に立って幼児の気持ちを読み取る力 ④経験や活動を幼児の発達にそって理解し、指導する力が必要である。

そのためには、幼児と共に生活しながら、常に理論を考えて、日々の指導の反省時に幼児とのやりとりを振り返り、しっかりした学問的な裏付けで答えを出し、幼児理解を深める必要がある。

7. 研究のまとめ

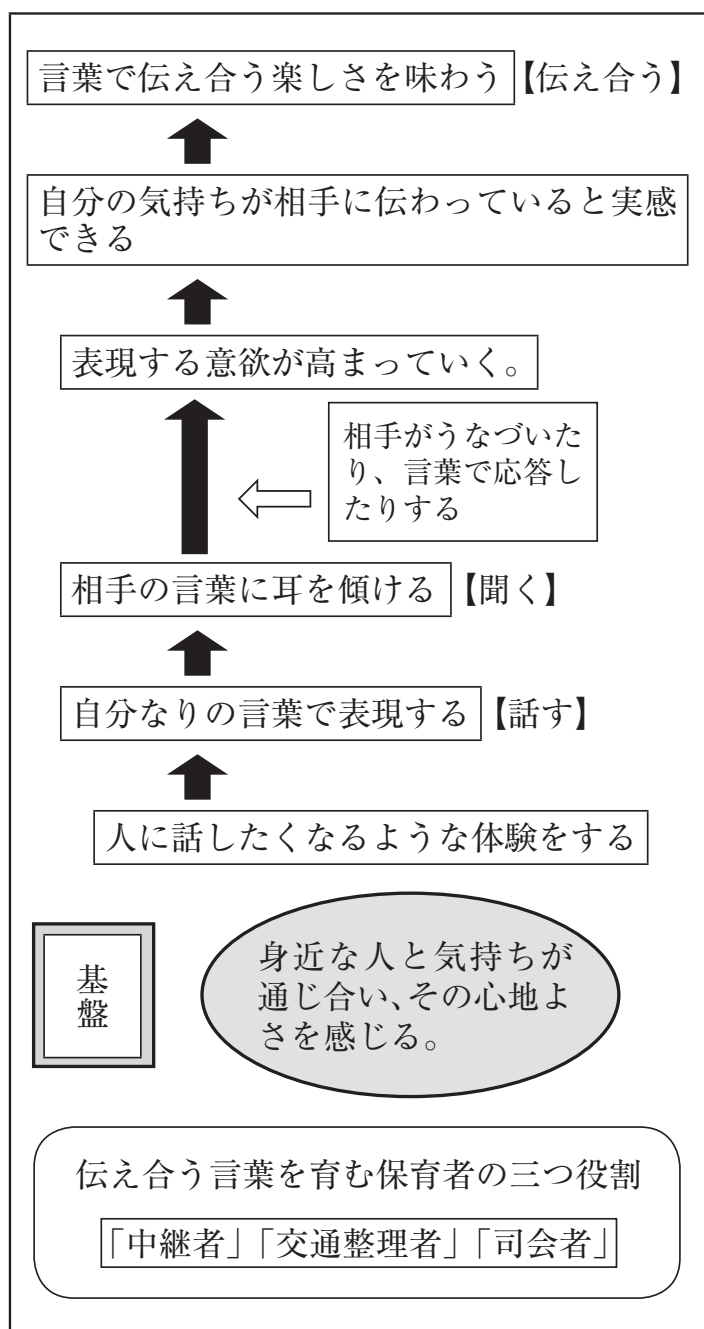
幼児が、遊びや生活の中で、言葉にして他者に伝えたいような生き生きとした体験をすることが、話すことへの動機づけとなり、言語表現を生み出す。

そして、幼児が人に話したくなるような体験をし、自分なりの言葉で表現できた【話す】時に、相手がうなずいたり、言葉で応答したりすることで、楽しくなり、言葉で表現しようと意欲が高まっていく。また、自分の気持ちが相手に伝わっていると実感できると、相手の言葉にも耳を傾ける【聞く】ことができるようになり、伝え合う楽しさを味わうことができる。このような体験が積み重なると、幼児一人一人が場面に応じた言葉が使えるようになり、「言葉による伝え合い」【伝え合う】の姿が生まれる。

つまり、「言葉による伝え合い」は、乳児期に育まれた人への信頼感を基盤に**【話す】→【聞く】→【伝え合う】**という3つの過程を経ながら、育まれていく。

以上のことから「言葉による伝え合い」の過程を表すと次ページ図1のようになると考える。

図1 「言葉による伝え合い」の過程



8. 課題

本研究は、保育者2名・抽出児2名による事例の検討にとどまった。多数の保育者や抽出児を対象に汎用的な知見を導く必要がある。

引用文献

- 1) 文部科学省「幼稚園教育要領」(2018 3月)
- 2) 厚生労働省「保育所保育指針」(2018 3月)
- 3) 内閣府・文部科学省・厚生労働省「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」(2018 3月)
- 4) 高杉自子 柴崎正行 戸田雅美編『新保育講座 保育内容「言葉I」』(2005 萌文書林)
- 5) 無藤 隆監修 高濱裕子編者代表「事例で学ぶ保育内容 領域 言葉」(2011 萌文書林)
- 6) 無藤 隆「10の姿プラス5実践解説書」(2018 ひかりのくに株式会社)
- 7) 加藤ひとみ 大國ゆきの「幼児期の言葉の獲得」(2015東京成徳短期大学紀要)